

新渡戸カレッジ「開校式」を挙行 春の叙勲に本学から5氏

お知らせ

- ・ ProSPER.Net博士課程学生向けサマースクール「Young Researcher's School (YRS)」の募集について
- ・ 北海道地区福祉共同事業契約宿泊施設の開設
- ・ インフォメーションセンター「エルムの森」で企画展示を開始





新渡戸カレッジ開校式



全学教育科目に係るTA研修会

1 サステイナブルキャンパス実現に向けて

■ 全学ニュース

- 2 新渡戸カレッジ「開校式」を挙
- 3 春の叙勲に本学から5氏
- 9 平成25年度「全学教育科目に係るTA研修会」を開催
- 9 「新生対象留学オリエンテーション」を開催
- 10 北大フロンティア基金
- 12 「日本語研修コース」入学式を挙

■ 部局ニュース

- 13 工学院で初のダブルディグリー取得者が誕生
- 13 工学研究院で四大学工学系人材交流プログラムキックオフミーティングを開催
- 14 経済学研究科で、ワルシャワ経済大学＝北海道大学ジョイントワークショップを開催
- 14 経済学部がメンタルヘルス講演会を開催
- 15 工学部が第2回心のケアに関する講習会を開催
- 15 工学部が救急救命講習会を開催
- 16 水産学部3年生キャンパス移行式を実施
- 16 水産科学院・水産学部でTA研修会を開催
- 17 文学研究科FD研修会「セクシャル・ハラスメントの防止等のために文部科学省職員が認識すべき事項についての指針」を開催
- 17 平成25年度薬学実務実習開始セレモニーを挙
- 18 脳科学研究教育センター発達脳科学専攻の開講式を挙
- 18 総合博物館で企画展示「北のすみれ」を開催
- 19 旧制大学期の卒業記念写真帖を大学文書館で受贈

■ お知らせ

- 20 ProSPER.Net博士課程学生向けサマースクール「Young Researcher's School (YRS)」の募集について
- 22 北海道地区福祉共同事業契約宿泊施設の開設
- 23 インフォメーションセンター「エルムの森」で企画展示を開始

■ 諸会議の開催状況 24

■ 学内規程 24

■ 研修

- 25 平成25年度北海道地区国立大学法人等初任職員研修(一般職)

■ 表敬訪問 26

■ 人事 27

- 30 部局長等(再任)紹介
- 30 新任教授紹介

■ 訃報

- 31 名誉教授 石黒 亮二 氏

■ 資料

- 32 役職員数(平成25年5月1日現在)



「日本語研修コース」入学式



工学院で初のダブルディグリー取得者が誕生



文学研究科FD研修会「セクシャル・ハラスメントの防止等のために文部科学省職員が認識すべき事項についての指針」



薬学実務実習開始セレモニー

サステイナブルキャンパス 実現に向けて

施設・環境担当理事 ^{みかみ}三上 ^{たかし}隆



20世紀は、産業・経済ともに大量生産、大量消費という消費型の社会でした。他方で、この百年に人口は2倍以上に増加し、今や71億余人が地球上に住んでいます。これまでの生活を続けていけば、エネルギーや資源は急速に枯渇し、生命線となる水や食料も確実に不足すると考えられます。そうした事態に至らぬためにも、21世紀の今日、これまでの消費中心の社会構造から持続可能な社会への転換が大きな課題となっています。大学は、この問題の解決、すなわち持続可能な社会の形成に向けて水先案内人となる重要な役割を担っており、キャンパスをひとつの持続可能なモデル社会と見立て、様々な試みをしています。サステイナブルキャンパスとは、このように持続可能な社会のモデルとなるものです。以下に、本学のサステイナブルキャンパスに対する取組みについて紹介します。

なお、サステイナブルキャンパスの実現は本学の中心課題のひとつであることから、本学の第2期中期目標では、世界水準の教育・研究を支える高度なキャンパス整備及び環境配慮型キャンパス整備を推進することを掲げています。

サステイナブルキャンパス推進本部

札幌で2008年に開催されたG8大学サミットにおいて、「札幌サステイナビリティ宣言」が採択され、「大学は持続可能な社会実現のための原動力になる」という決意が示されました。本学では、この決意を現実のものとするべく、「サステイナブルキャンパス推進本部」を平成22年11月に設立し、教育・研究を含めた総合的な取組みを行っています。

当推進本部は、サステイナブルキャンパスを実現するための計画立案、アセスメントの実施などの業務を担う「キャンパスアセスメント部門」、環境負荷低減に関する実行計画の立案、省エネルギー対策の推進などの業務を担う「環境負荷低減対策推進部門」、及び省資源、資源の循環利用の業務を担う「環境保全センター」から構成されています。また環境負荷低減対策を実施するには全学的な連携体制が必要なことから、各部局には「環境負荷低減推進員」を置いています。

サステイナブルキャンパス構築のためのアクションプラン及びサステイナブルキャンパス評価システム

本学では全国の大学に先駆け、平成24年3月にアクションプランを策定しました。サステイナブルキャンパスを実現するため、平成17年9月に策定された本学の環境に関す

る基本方針を実行に移す指針となるものです。

基本方針は、①教育研究を通じた地球環境及び地域環境への配慮、②環境情報の発信による社会への貢献、及び③大学運営に伴う環境負荷の低減、という3つとなります。

方針①については「教育と研究」の2方策、方針②については「学内外への周知・啓発、地域社会との協働、国内外のネットワーク構築」の3方策、方針③については「生態環境、北の森林プロジェクト、建物の省エネ対策、エネルギー、3R (reduce, reuse, recycle) 対策、水、食糧、交通計画、省スペース、購入」の10方策が挙げられています。

また、平成25年3月に導入した評価システムは、アクションプランの実践状況の進捗について、運営、教育研究、環境、地域社会の4部門で評価するもので、これら諸部門における本学の目標達成度を明らかにすることで、次のアクションへの明確な指針を与えることを目的としています。

キャンパス環境保全とサステイナブルキャンパス推進事業の取組状況

以下に平成24年度の主な取組みを列挙します。

(1) 札幌キャンパス構内の生物多様性の保全、及びキャンパス計画におけるアセスメントへの利用を目的とする生態環境調査を実施し、データベースを構築しました。また、一般向けに、「札幌キャンパス生きものマップ」としてWeb上で公開しました。

(2) 環境負荷低減パイロット事業では、電力メーターを新たに88ヶ所に設置して使用電力の「見える化」を部局単位まで進めた結果、使用最大電力は平成22年度比で夏5.6%減、冬1.4%減、電力使用量では夏5.1%減、冬1.7%減の省エネルギーを達成しました。

(3) サステイナブルキャンパス実現のための戦略及び評価手法の確立を目的として、EU3大学(トリノ工科大学、アムステルダム自由大学、ケンブリッジ大学)との共同研究を推進し、10月には本学において、国際シンポジウムを開催しました。

サステイナブルキャンパス構築は、本学を取り巻く地域社会、市民の理解と協力があってこそ成り立つものです。その構築のためには、5月13日(月)に実施した「キャンパス・クリーン・デー」などの行事を通じて、教職員、学生とともにサステイナブルキャンパスへの意識を高め、地域社会との協働を一層進めていく必要があります。

■全学ニュース

新渡戸カレッジ「開校式」を挙



開校式における校長（総長）挨拶

学生の国際性を涵養し、国際社会の発展に寄与する人材の育成を目指す目的で本年4月に開設した「新渡戸カレッジ」の開校式を、5月15日（水）に高等教育推進機構大講堂で執り行いました。

開校式には、山口佳三総長（校長）、数土文夫北海道大学連合同窓会会長（副校長）、新田孝彦理事・副学長（副校長）をはじめ、理事・学部長等が出席するとともに、新渡戸カレッジフェロー（同窓生）及び第1期生となるカレッジ生が参加しました。

式典では山口校長から「新渡戸カレッジは、札幌農学校を卒業し、世界で活躍した新渡戸稲造にちなんで名付けられたもので、その精神を受け継ぎ将来、国際社会で活躍するグローバルリーダーを目指して欲しい」と挨拶があり、数土副校長からの激励の挨拶に続き、カレッジ生を代表して山田恵美子さんから「英語力だけでなく、国際社会で強く生き抜く力を身につけたい」と将来の抱負が述べられました。

続いて、カレッジ生の良き理解者、助言者、教育者として自立的な成長を見守り・支える役割の新渡戸カレッジフェロー10人の紹介がありました。

開校式終了後には、初めての「フェローとカレッジ生の交流会」が別室で行われ、「グローバル人材とは何か」という基本テーマに基づき、10グループに分かれて、活発かつ和やかに交流が行われました。

国際コミュニケーション力の育成等に関する教育プログラムである「新渡戸カレッジ」は、平成24年度文部科学省グローバル人材育成推進事業に採択された事業であり、本年4月に全学部の新入生（学部1年生）から397人の入学希望者があり、語学試験で選抜された129人が入校しました。

今後、カレッジ生は、留学支援英語、多文化交流科目、フィールド型演習、海外留学など、卒業までに15単位以上の授業科目の修得を目指すこととなります。

（学務部教務課）



学生代表の挨拶



開校式に出席するカレッジ生



フェローとカレッジ生との交流会

春の叙勲に本学から5氏

このたび、本学関係者の次の5氏が、平成25年春の叙勲を受けることについて、4月29日（月）に発表となりました。

勲章	経歴	氏名
瑞宝中綬章	名誉教授（元 スラブ研究センター教授）	望月喜市
瑞宝中綬章	名誉教授（元 地球環境科学研究科教授）	喜多英明
瑞宝中綬章	名誉教授（元 電子科学研究所教授）	小山富康
瑞宝中綬章	名誉教授（元 工学部教授）	荒谷登
瑞宝双光章	元 北海道大学病院診療支援部長	鈴木春樹

各氏の長年にわたる教育・研究等への功績と我が国の学術振興の発展に寄与された功績に対し、授与されたものです。各氏の受章にあたっての感想、功績等を紹介します。

（総務企画部広報課）



もちづき きいち
望月 喜市 氏

感想

この度、因らずも叙勲の栄を賜り感謝に堪えません。ひとえに先学・同輩のご指導のおかげと思っています。ソ連・ロシア

関係で業績が評価されたことは、我が国におけるこの分野の学問的発展にも何らかのプラス効果があるかと嬉しく存じます。

現在研究の最前線を担っているこの分野の中堅研究者が、私の時代の研究水準をはるかに超えたとともに、国際的に大いに活躍していることは喜ばしい限りです。

私の研究の出発点は、貧乏や失業・倒産現象をどうしたら無くすことが出来るかという問題意識でした。社会主義への傾倒とケインズの完全雇用政策からソ連の数学的計画経済の研究を志すようになりました。1973年から1年3か月ほど、文部省の派遣研究員としてモスクワ大学経済学部在籍し、大学内の学生寮に夫婦で住むことになりました。ブレジネフ長期政権下のモスクワの市民生活を体験出来たことは、ソ連の研究者として幸せなことでした。東欧圏やアジアからの学生、日本からの留学生もそこそこ学生寮にあり、互いに交流し青春を謳歌しました。治安状態は非常によく、女性の深夜の1人歩きも何の心配もありませんでした。構内を乳母車に赤ちゃんを乗せた学生夫婦なども散見されました。消費財の品質・種類の不足と並んで、西側の専門書や文学作品も殆ど見かけませんでしたが、宇宙船スプートニクなど軍事部門だけが突出していました。

モスクワ大学では、数学的計画経済でトップクラスの研究者に師事しましたが、十分なソ連の統計データがなく、止むなくアメリカのデータを使って自己の計画理論を彫琢する有様でした。1975年米国のチャリング・クープマンズと共にノーベル経済学賞を受賞したレオニード・カントロヴィッチ（Leonid Vital'evich Kantorovich）の資源の最適配分に関する理論の計画経済への適用を私は研究しました。ソ連の理論経済学者は優秀でしたが、その研究の経済行政への応用は、化石のような企業経営官僚機構に阻まれ全く実現しませんでした。

次に忘れられないのは、70年余り続いたソ連が、意外なほどあっけなく崩壊し、民主主義と市場経済の新路線歩むことになったことでした。当時、ハバロフスクを中心に市場経済のレクチャー活動をスポンサーと通訳のトリオで巡回したものでした。市民の生活はどん底で、市電やバスの破れた窓は板で打ちつけられ、満員バスでは、着ぶくれた通勤者で息も出来ないありさまでした。

ロシア経済は、プーチン大統領の登場によってどん底経済から這い上がりました。今では世界長者番付けにも複数の億万長者が登場し、モスクワの歓楽街はネオン輝く不夜城になりました。現在のプーチン長期政権は、アジア太平洋方面に軸足を移動し、欧州とアジアに両足を踏まえる文字どおりユーラシアの巨人国家に変貌する政策を追求しています。その中で、ロシアにとって日本は、中国と並んで重要な国となっています。

今後、私は生涯現役のつもりで、日ロの相互理解の拡大、ロシア経済論、ソ連崩壊の経済的分析など学術研究と市民活動の両分野で努力する覚悟です。

功績等

望月喜市氏は主にソ連・ロシア経済の3つの分野で優れた業績を残されています。

第1は社会主義経済システムの研究で、数理経済的手法を駆使した理論的な研究だけでなく、ソ連・東欧諸国の経済システムの改革に関して密度の濃い現状分析を行われました。1960年代にソ連で実施された経済改革を対象とした研究成果は、学位論文「計画経済と社会主義企業」にまとめられ、一橋大学から経済学博士号を授与、ソ連経済の卓越した研究者として学界における不動の地位を築かれました。

第2はソ連・ロシア経済の実証的、統計的研究です。特に、ソ連経済の再生産構造、国民所得循環に関して基礎的かつ綿密な研究を行われました。これらの基礎研究とそれに基づく軍事費推計などの一連の業績は、国内はもとより国際的にも高い評価を受け、ソ連経済に関する統計情報が限られていた時期における研究は、日本のソ連経済実証分析の先駆的業績と位置づけられています。また、スラブ研究センターでは、同氏が主導し日本初の試みである「ソ連経済統計データベース (SESS)」が作成されました。

第3は日本とソ連・ロシアとの経済関係の研究です。経済関係発展に何が重要かという実務的な関心から、日本に近いシベリア・極東経済の研究でも多くの先駆的な業績を残されました。また、ロシア極東地域研究者との間で様々な共同研究を組織、数多くの成果を刊行、日本とソ連・ロシア、あるいは北海道とシベリア・極東との経済交流の発展に理論的指針を与えるものとなりました。

本学経済学部、教養部においてはソ連・ロシア・東欧諸国の経済に関する講義で教育に尽力され、多くの学生に多大な薫陶を与えられました。また、数十回にわたる国外出張、研修旅行により、ソ連・ロシアはもとより、ヨーロッパ、北米、アジアの国々に赴かれ、ソ連・ロシア研究に携わられるとともに、国際学術交流を深められました。とりわけ、ロシア極東地域は毎年のように訪問、北海道と同地域との学術交流促進のうえで多くの功績を果たされました。

長年にわたり社会主義経済学会（現在は比較経済体制学会）幹事を務められ、社会主義経営学会、日本経済政策学会、ソ連・東欧学会、日本国際経済学会など幅広く学会活動に参加されました。また、国際ソ連東欧研究学会世界大会ならびに米国スラブ学振興学会年次大会に積極的に参加、スラブ研究の国際交流を推進、日本のスラブ研究の水準向上に寄与されました。

学内においてはスラブ研究センター内外の諸委員のほか、昭和58年4月から同60年3月までスラブ研究センター長を務められ、北海道大学評議員として全学の管理運営に参画されました。平成5年には北海道大学永年勤続者表彰を受けられました。

略歴

生年月日 昭和6年4月1日

昭和32年5月 } 東京都立立川高等学校教諭
昭和37年3月 }

昭和37年4月 立命館大学経営学部専任講師
昭和39年10月 立命館大学経営学部助教授
昭和44年4月 小樽商科大学助教授
昭和47年6月 小樽商科大学商学部教授
昭和53年4月 北海道大学スラブ研究センター教授
昭和58年4月 北海道大学スラブ研究センター長・
昭和60年3月 北海道大学評議員
平成6年3月 北海道大学停年退職
平成6年4月 北海道大学名誉教授

(スラブ研究センター)



きた ひであき
喜多 英明 氏

感想

この度、叙勲の栄に浴し、身に余る光栄に存じております。大学及び大学院の学生として勉学に、さらに長年教員として、

教育ならびに研究に携わることになり、その間多大かつ適切な機会とご指導をいただきましたことを、恩師の堀内寿郎教授をはじめ、先輩の諸先生、関係各位の皆様へ深く感謝申し上げます。

私は戦後旧制の北海道大学予科に入学しましたが、入学後肋膜炎にかかり休学、翌年新制大学の1年（昭和25年）に編入され理学部化学科、同大学院修士課程を経て、北海道大学触媒研究所助手に採用されました。所長は理学部化学科物理化学教室教授の堀内寿郎先生で絶対反応速度論では世界に冠たる先生でした。私が戴いた研究は、水を電気分解するときの陰極で起る水素電極反応 $2H^+ + 2e^- \rightarrow H_2$ で数ある反応の中で最も簡単な反応ですが、電極が触媒として作用しています。したがって、金属触媒作用を解明するには格好な反応と云えることから、金属の殆どで測定されている結果を総合的に解析して触媒活性を判定し明確な規則性の存在を確立するに至りました。これを契機に有機物の電解還元反応に拡張し、いわゆる“エレクトロカタリシス”の基本的な概念に明快な指針を導入することが出来ました。

昭和49年4月から北海道大学理学部教授に任命され、特に教養部における教務委員を仰せつかり、全学的な各種委員会に関与することから最も多忙な時期を過ごした次第でした。

末尾となりますが長年にわたる御激励・御協力をいただいた皆様へ重ねて御礼を申し上げますと共に、北海道大学の益々の御発展を、心からお祈りいたします。

功績等

喜多英明氏は、昭和6年9月22日に北海道生まれ、同29年3月北海道大学理学部を卒業、同31年3月北海道大学

大学院理学研究科修士課程を修了し、北海道大学助手、助教授を経て同49年4月に北海道大学理学部教授に昇任、その後新設の北海道大学大学院地球環境科学研究科に配置換え、平成7年3月に停年にて退職されるまで本学の教育・研究に努め、同年4月に北海道大学名誉教授になられました。

同氏は、電極触媒反応の速度論及び電気化学エネルギー変換の分野において幅広く教育・研究活動に従事し、数多くのすぐれた研究成果を発表しています。なかでも、水電解による水素製造との関連で現在でも関心の高い水素電極反応の研究に従事して数多くの実験的・理論的研究を行い、反応機構の解明に大きく貢献されました。また、各種有機化合物の電解還元反応の反応機構も精査し、水素電極反応の結果と合わせ、金属電極は反応機構を異にする2群に大別されるという一般則を提案されました。この一般則は種々の電極触媒反応に対し、金属の電子構造と反応機構の関係について一般的指針を与えている点で現在においても極めて重要なものとなっております。さらに同氏は、これらの研究を基盤として、燃料電池反応や環境修復反応などについて、原子レベルで規制された金属単結晶から固体高分子電解質膜に金属を分散付着した膜電極に至るまでの多方面の研究を展開し、基礎的及び実用的な両面において、国の内外を問わず高く評価される研究を遂行されました。これらの研究に対して昭和50年に電気化学会賞、同63年に触媒学会功績賞及び平成17年に電気化学会功績賞を受賞されております。

学内においては、北海道大学評議員、教養部長補佐、教養部教務委員長など多数の委員を歴任され、一般教育の充実をはじめとする北海道大学の発展に尽力されました。また、触媒学会、電気化学会、日本化学会、北海道青少年科学文化財団で理事、産業技術総合開発機構固体高分子型燃料電池部会会長を務められるなど学術、地域教育の発展にも大きく寄与されております。

以上のように、同氏は電気化学、触媒化学、物理化学の分野において多くの優れた研究業績を挙げて学術の進歩と発展に多大の貢献をするとともに、永きにわたり学生への教育・指導及び後進の育成に尽くし、さらに部局ならびに全学の運営に携わり大学の発展に大きく寄与されており、その功績は誠に顕著であります。

略 歴

生年月日 昭和6年9月22日
 昭和31年4月 北海道大学触媒研究所助手
 昭和38年4月 北海道大学触媒研究所助教授
 昭和49年4月 北海道大学理学部教授
 平成5年1月 } 北海道大学評議員
 平成7年3月 }
 平成5年4月 北海道大学大学院地球環境科学研究科教授
 平成7年3月 北海道大学停年退職
 平成7年4月 北海道大学名誉教授

(環境科学院・地球環境科学研究院)



こやま とみやす
小山 富康 氏

感 想

半世紀以上にわたり、北海道大学に於いて研究する場をいただき、今また齢80歳を迎えるに当たり、生存者叙勲の榮譽を賜

ること、まことにありがたく御礼申し上げます。思えばこの数十年、日本人の生活と科学技術の進歩はまことに目覚ましく、小学生が素粒子、ダークマター、地球の誕生47億年などと口にするようになりました。平均寿命は80歳を超え、昭和22年の50歳を大幅に超えております。私自身手作りの草履で、時には裸足で小学校への2kmを歩いたところと比べ、信じられないほどの感慨を覚えます。生活環境の飛躍的改善とともに現代の科学の進歩は本当に目覚ましく、私など遺伝子研究やiPS細胞の誕生などの発展から取り残されたと感じております。このような時代遅れの人間が叙勲の顕彰をいただくことは真に恐れ多いと感じております。

お世話になった望月政司教授の、生命の維持は酸素の取り込み、及び酸素と如何に付き合うかに掛かっている、という言葉が今も耳に残っております。在職中はレーザー光を用いての肺血流速度の測定、細胞膜脂質の揺動の測定、ラット心筋の毛細血管の虚血再灌流応答などの研究を行ってきました。定年退職後は高等看護学校などで生理学の授業を担当しながら、旭川医科大学で行われる、足底壊疽の血管外科治療法としての静脈への動脈吻合法について検討してきました。この処置により、静脈を通して安静時の足筋に酸素を補給できるという結論を得ました。この疾患は欧米人に発生頻度が高いので、外国での学会で大きな反響を得ました。また呼吸の比較生理学的研究として卵殻の呼吸孔についての研究を進めております。卵殻内の胚も酸素を必要とするので、鶏、ダチョウの卵殻には径数百ミクロンの呼吸孔があることが判っております。水中に産卵されるトンボの卵殻の内面にも、呼吸孔と思われる径数十ナノメートルの微小孔が無数に見つかりました。酸素溶解度の小さい水中に置かれる卵は沢山の微小孔を用意することにより酸素摂取を可能にしているとみられます。では巨大恐竜の化石化した卵殻に呼吸孔は確認されるのであろうか、老化した私の脳に興味を煽っております。この期に及んでなお、このような想いを巡らせながら生活できるのも、一重に北海道大学に在籍できたことと、21世紀に生きることのできた幸運に恵まれた賜物と感謝しております。同時に北海道大学の自由な研究環境が永遠であることを心から願っております。

功績等

小山富康氏は、昭和8年7月8日神奈川県に生まれ、同31年3月東京大学農学部水産学科卒業後、同33年3月東京大学大学院生物系研究科修士課程を修了し、同33年6月同

大学大学院生物系研究科博士課程を中途退学後、北海道大学応用電気研究所助手に採用されました。昭和36年10月助教授、同50年3月教授に昇任し、同57年10月から同60年9月までは同研究所附属電子計測開発施設長として施設の充実・発展に尽力し、平成9年3月停年により退職され、同年4月北海道大学名誉教授とされました。

この間、同氏は呼吸循環系の基礎的研究と計測法の開発を行われました。初期には赤血球のガス交換の解析に意を注ぎ、酸素化速度の測定法開発、酸素化効率に対する表面境界層の影響等について成果を上げられました。微小血管の血流速度測定手段として、レーザードップラー顕微鏡流速計を導入し、ウシガエルの肺微小血管中の局所的な高炭酸ガス、低酸素症の影響に関する実験等を行われました。この方法は、生体内の毛細血管網を直接測定でき、循環器疾患を解明するのに大いに役立ちました。

さらに、赤血球膜等の構成分子の運動を解明するために、サブナノ秒時間分解偏光消光法を用いられました。リン脂質の長さを人工的に変えると、振動速度・細胞膜の蛋白質の機能効率も変わる等、興味深い性質を明らかにし、この方面の研究に先鞭をつけられました。

定年退職後も、国際生体酸素輸送学会等に参加し、研究成果を世に問われています。近年は閉塞性動脈硬化症の治療法について共同研究を進められ、同学会で、足底の静脈に動脈をつなぎ逆行性に酸素を供給する理論的根拠を提示された際には、正常な血液走行とは異なる逆転の発想に参会者の驚きと賛辞を得られました。この方法については、実際の治療にも活用され、成果が上がりがつあります。

学外においては、種々の国際的な学会の理事、評議員、事務局長等を歴任するなど活発な活動を行い、世界の呼吸生理研究の発展に寄与されました。

教育面においても、多くの学生の教育・研究指導に当たり、優れた研究者を輩出され、退職後も北海道大学医学部や看護師専修学校等において、今日に至るまで教壇に立たれています。

以上のように、同人は38年以上にわたり本学の研究教育・運営に尽くすと同時に、第一線を退いた現在も、わが国及び世界の学術研究の発展に貢献し続けており、その功績は誠に顕著であります。

略 歴

- 生 年 月 日 昭和8年7月8日
- 昭和33年7月 北海道大学応用電気研究所助手
- 昭和36年10月 北海道大学応用電気研究所助教授
- 昭和50年3月 北海道大学応用電気研究所教授
- 昭和57年10月 } 北海道大学応用電気研究所附属電子計測開発施設長
- 昭和60年9月 }
- 平成9年3月 北海道大学停年退職
- 平成9年4月 北海道大学名誉教授

(電子科学研究所)



あらたに 荒谷 登 氏

感 想

このたび、叙勲の栄に俗し、身に余る光栄に存じます。

大学卒業後3年間の実務経験を経て、再び大学院に戻り、昭和38年からの36年間、よき師と同僚、学生、卒業生に恵まれた研究生活を送り、成長させていただいたことを感謝しております。特に、卒業後に研究者の道へと導いてくださった大野和男先生、自由な発想で研究に取り組むことを尊重しつつ適切な助言を与えてくださった堀江悟郎先生には感謝しており、人生の師として尊敬しております。

大学院での課題は、京都大学の総長をされた故前田敏男先生が満州時代から取り組んでおられた室温変動理論の実用化で、暖房停止後の室内での凍結事故防止という、まさに毎日の我が家で起こっていた問題への取り組みでした。

大学院を出てすぐ待ち受けていたのは、昭和47年の札幌冬季オリンピックに向けての地域暖房化への課題でした。北海道から“住宅団地の集中暖房の可能性に関する調査研究”の委託を2年契約で2度にわたって受け、集中暖房設備を持つ集合住宅を探し出して、暖房設備の運転状況と室温の長期測定をしました。この経験は、私にとって暖房や断熱と建物の熱的な性質や生活との関わりを知る研究への貴重な出発点になりました。

雪と寒さを克服すべき地域の欠点であると考えていた当時の私が、温かさを求めて最初に建てた100mm断熱・温水暖房の試験住宅に住んで発見したことは、断熱の効果は省エネルギーよりも環境の穏やかさであり、暖房とは温かくすることではなく室内から寒さを除くこと、外の寒さに親しむためのものであるということでした。また、聖書の創世記第1章31節にある“神がお造りになったすべての物をみられたところ、それははなはだ良かった”という言葉に接して、私が地域の欠点だと考えていた雪や寒さを神は良さであると言っておられることを知り、それまで欠点对応であった私の生活や研究の発想を良さ発見型に切り替え、雪や寒さを地域の財産と考えるようになりました。

私のこの転換は、昭和48年に起こった石油危機の3年前のことでした。そこから、無償の富としての自然エネルギーの素晴らしさや北海道の良さを生かす夏対応への取り組み、本州の伝統に学ぶ民家や町家の熱環境の調査など、学生や多くの研究者を巻き込んだ共同研究が始まりました。

昭和54年の第2次石油危機の年、次に起こるかもしれない第3次石油危機には家族皆がスキーウェアを着て過ごすことを覚悟して、全室暖房のコンクリートブロック造外断熱の試験住宅をつくり、結露を忘れる生活と伝統的な熱対流換気の応用で夏の暑さを忘れる生活を経験しました。

こうした私の研究関心は、やがて北海道の基幹産業である第1次産業の活性化につながり、その後、有機農業を求めて長沼町に移り住むことにもなりました。私の研究が地

域との会話から生まれたものであるだけに、その成果の発信も常に地域に向けられたものであったと感じています。

今回の受章は、私個人よりも地域と研究者との対話に与えられるものであると思ひ、このような大学と地域との対話が他の分野にも広がっていくことを願っています。

功績等

荒谷 登氏は昭和31年3月に北海道大学工学部建築工学科を卒業し、3年間の大成建設株式会社勤務の後、同34年4月に北海道大学工学研究科修士課程に入学、同36年修了、同年4月より北海道大学工学部に講師として採用され、同37年に助教授、同49年4月に教授に昇任され、建築工学科建築環境学講座を担当して建築環境・建築設備の分野の発展に努力され、平成9年3月に定年退職、同年4月より名誉教授として今日に至っています。

研究面では、北海道大学にて主として建物の熱特性と熱環境計画に関する研究に取組まれ、寒冷地の住居の熱環境改善と室温及び熱負荷の非定常伝熱解析の分野で独創的かつ先端的な研究を行い、この分野の発展に貢献しました。

物理的な明確さを欠く従来の熱負荷計算法に対して、自然取得熱による室温上昇を考慮し、間欠暖房時の日平均室温低下率と予熱負荷割増係数を定義して、間欠と連続運転の違いを明確にし、逐次積分法と呼ぶ室温及び熱負荷の非定常伝熱計算法を国際会議にも発表して、当時普及し始めた電算機による解析を容易にしたほか、室温が安定する断熱建物では内・外気温、取得熱、熱負荷それぞれの日平均値を用いた定常伝熱解析での暖冷房計算が可能であることを示して、物理的な根拠に立った熱環境計画を可能にしました。

昭和37年と同40年には冬期札幌オリンピックに向けて、北海道から“住宅団地の集中暖房の可能性に関する調査研究”の委託を2度にわたって受け、その成果に対して昭和44年には空気調和衛生工学会論文賞が与えられ、学内でも大学全体の地域暖房計画専門委員としてその検討に当たってきました。

昭和48年には住居の熱環境計画への研究で北海道大学から工学博士の学位を受け、これに対して同51年度の日本建築学会論文賞が与えられ、その成果の社会貢献に対して平成9年に北海道新聞文化賞が与えられています。

建築学会の支部活動では、環境分野の他の研究者と共に積極的に地域シンポジウムを開催して各地に出向き、地域の発展と地域リーダーの育成を図るとともに、外断熱を含む寒地住宅の性能改善と普及に指導的な役割を果たし、ともすると中央指向、国際化指向に陥る大学の活動に対して、地域文化の育成に関わる大学の使命の大切さを訴えてこられました。

氏が北海道建築指導センターから出版した寒地系住宅の熱環境計画に関する5冊の小冊子は、一般市民向けに書かれたやさしい内容ですが、その中で繰り返し訴えられている地域性や自然エネルギーの個性の尊重、持っている特質をより一層顕著にする“奪い合うことのない成長”などは、

これからの持続可能な成長への大切な指針であると思ひます。

略 歴

生年月日 昭和8年10月3日
昭和31年4月 }大成建設株式会社
昭和34年3月 }
昭和36年4月 北海道大学工学部講師
昭和37年6月 北海道大学工学部助教授
昭和49年4月 北海道大学工学部教授
平成9年3月 北海道大学停年退職
平成9年4月 北海道大学名誉教授

(工学院・工学研究院・工学部)



すずき はるき
鈴木 春樹 氏

感 想

この度平成25年度春の叙勲の栄に浴し、身に余る光栄と思っております。私がこのような機会に恵まれたのはひとえに諸先輩、同僚、後輩など多くの皆様方のご指導、ご支援の賜物と感謝し、心から厚くお礼申し上げます。

私は昭和46年の卒業と同時に北海道大学病院に採用され、検査部（現在は検査・輸血部）の細菌検査室に配属になりました。現在細菌検査に使用する培地は市販の製品を使用していますが、当時はほとんどが自家製でした。月曜日にはその週に使用する培地をオートクレーブで滅菌して作るのが日課でした。これがなかなか時間を要し、午前中はほぼ培地作りだったと記憶しています。1年後に生化学検査室に移動になり、そこで検査の自動化に触れることになりました。生化学検査はそれまで用手法で行っていた検査を分析機器を使用して行う自動化へと移り変わる時代でした。初期の自動分析機は米国製でしたが、故障が多く、修理できる担当者が東京にしかおらず故障したら東京から来るのに半日から1日かかったため、その間はまた用手法で分析したりで結構苦勞しました。その後日本製の自動分析機が登場し、それが故障も少なく大変優れていたため、自動分析機の普及が進み、検査の自動化、迅速化に貢献しました。大量のデータを処理するためにコンピュータが導入され、システム化が推進され、検査データを正確に迅速に提供することが可能となりました。平成9年に検体検査部門が新棟移転した際に自動化をさらに進めた検体検査搬送システムを導入しました。これにより検査結果の報告時間を大幅に短縮、人員の省力化を図り、新たに遺伝子検査等を実施しましたが、特筆すべきは外来患者の採血を中央化したことでした。及川元看護副部長ら看護部の方々と協議を重ね看護部の協力を受けて10月より開始しました。開

当初は診察室から離れており、移動距離が長い、待ち時間が長い、部屋が暑い、採尿室が狭い、汚い、採血技術が未熟等多くの苦情がありましたが、採血室と採尿室の改装、実技講習を実施しての採血技術の向上、採血者の増員等を行って一つ一つ改善を重ね現在に至っています。今は中央採血が診察前検査の一環として定着したものとなりました。エコー検査では渡邊前診療支援部長の後を引き継ぎ、放射線部との協力体制でエコーセンターを設置することができました。エコー検査は増加の一途をたどり、検査の待ち日数が長かったのが待ち日数の短縮化が図られ、診療科の要望に応じられたと思っています。

平成16年の法人化に併せて診療支援部が設立され、多くのコメディカルスタッフが所属しており、200名を超える部門となっています。診療支援部は院内各部門の専門業務を行い、病院機能の欠かせない部門を担っています。業務の効率化のみならず、医療安全、専門化した技術への対応、さらに近年は病院経営への貢献等も求められており、これらの対応に追われた日々でした。

40年間北海道大学病院に勤務し、北大の四季にふれながら無事に定年を迎えることができました。これもひとえに病院各位のご協力とご支援の賜物と心より感謝しております。

最後になりますが、北海道大学、北海道大学病院の益々のご発展を祈念申し上げます。

功績等

鈴木春樹氏は、昭和25年5月13日に北海道稚内市に生まれ、同46年3月北海道大学医学部附属衛生検査技師学校を卒業し、同46年4月に北海道大学医学部附属病院臨床検査技師に採用され、平成23年3月まで勤務されました。

同氏は検査の自動化、システム化の流れの中で主導的な役割を担い、積極的にこれを推進し、検査データを正確に速く臨床に提供するように努められました。

平成9年には同氏の指導の下に一貫した検体搬送システムが導入され、人員の省力化が図られ迅速性が増しました。これにより省力化された人員を振り分けたことにより、HIV患者の薬剤耐性遺伝子検査、血液関連疾患患者の遺伝子解析を実施し、診療に大きく貢献されました。また、外来採血の中央化による採血の待ち時間短縮が図られ、各科看護師の効率化と患者サービスの向上に貢献されました。さらに、細菌検査においては土日祝日、細菌検査担当者が交代勤務で平日と同じ業務をこなす365日体制を国立大学病院として初めて確立されました。このシステムが高く評価され、細菌検査室の365日体制を採用する病院が増えていきます。

同氏の功績が認められ平成19年4月に北海道大学病院診療支援部検査部技師長兼診療支援部副部長、同22年4月には北海道大学病院診療支援部長に就任されました。

またエコー検査では放射線技師との協力体制を築き、同氏が診療支援部長になった平成22年には、これらを集約化する目的でエコーセンターが設置されました。造影検査件

数は道内一の実績を誇っています。

同氏は採用当初から、北海道大学医学部附属衛生検査技師学校（現北海道大学医学部保健学科）における臨地実習教育を担当し、平成8年からは北海道大学医療技術短期大学部衛生技術学科（現北海道大学医学部保健学科）において非常勤講師として学生教育に携わり、臨床検査技師の養成に大きく貢献されています。院外では社団法人北海道臨床衛生検査技師会の常務理事、事務局長を歴任され、技師会の発展に寄与されてきました。また同氏は北海道知事から委嘱を受け、北海道精度管理システム運営委員、北海道衛生検査所精度管理専門委員として北海道内の登録衛生検査所の精度管理調査にも尽力されています。

同氏は40年もの永きにわたり、臨床検査の向上と進歩に寄与し、後進の育成に尽力されてきました。その功績は誠に顕著であると認められます。

略歴

生年月日	昭和25年5月13日
昭和46年4月	北海道大学医学部附属病院
昭和47年8月	北海道大学医学部附属病院検査部臨床検査技師
平成2年6月	北海道大学医学部附属病院検査部主任臨床検査技師
平成7年4月	北海道大学医学部附属病院検査部副臨床検査技師長
平成15年10月	北海道大学医学部・歯学部附属病院診療支援部副臨床検査技師長
平成19年4月	北海道大学病院診療支援部臨床検査技師長
平成22年4月	北海道大学病院診療支援部長
平成23年3月	北海道大学定年退職

(北海道大学病院)

平成25年度「全学教育科目に係るTA研修会」を開催

高等教育推進機構では、TAの心構えや役割の理解を深めることを目的に、高等教育研究部高等教育開発研究部門が中心となって、平成10年度から全学教育を担当する新任TAを対象に研修会を開催しています。今年度は4月4日（木）に、大講堂及び講義室等を会場として開催し、約250名が参加しました。

午前の部では、新田孝彦高等教育推進機構長の挨拶に続いて、役員補佐の山口淳二教授による講演「北海道大学の全学教育について」及び文学研究科の瀬名波栄潤教授による講演「TAの

心得」等が行われ、参加者は熱心に聞き入っていました。また、教員と大学院生をパネラーに招いたパネル討論「TAの可能性～現状と理想」では、積極的な意見交換が行われました。

午後の部では、グループ学習として14の分科会に分かれて「授業におけるTAの役割」や「TAに期待される業務内容」等を中心に討論・発表等が行われ、参加者はTAの役割等についての理解を深めていました。

（高等教育推進機構）



新田機構長による挨拶



講演に聞き入る参加者

「新入生対象留学オリエンテーション」を開催

国際本部において「新入生対象留学オリエンテーション」を4月16日（火）、17日（水）及び19日（金）の3日間にわたり開催し、約160名の新入生が参加しました。この企画は、新入生に本学での留学機会・留学情報の入手方法・国際交流科目など、本学の留学支援システムについての概略説明を行い、留学に関心を持ってもらい、留学説明会などに積極的に参加してもらうことを目的として実施しています。

オリエンテーションでは、工学研究院 蟹江俊仁教授（16日）、経済学研究科 高井哲彦准教授（17日）文学研究科 瀬名波栄潤教授（19日）から、留学の意義について、それぞれのバックグラウンドや専門分野の話を織り交ぜた激励のメッセージがあり、今回のオリエンテーションを留学について考えるきっかけにしてほしいとの発言がありました。

次いで、国際支援課スタッフより、国際本部の活動内容の紹介、留学に関

する情報収集法や語学学習法の説明、留学生と交流できる機会、本学が実施している短期語学研修プログラム及びファースト・ステップ・プログラム（FSP）の紹介を行いました。最後に、国際交流サークルSACLAから活動内容についての簡単な紹介があり、参加者は最後まで熱心に聞き入っていました。終了後に、個別相談を希望する学生もみられ、留学に対する関心の高さがうかがわれました。

国際本部は、海外留学説明会を定期的に開催するほか、地域別・プログラム別説明会・各種セミナーを充実させるなど、本学の学生の留学をより身近なものとするため、情報提供に努めています。

国際本部では、留学相談も行っていますので、留学希望の学生にご紹介いただければ幸いです。

（国際本部国際支援課）



新入生に激励のメッセージを送る瀬名波教授



国際支援課職員からの説明

北大フロンティア基金

北大フロンティア基金は、本学の創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に創設しました。

募金目標額は50億円です。奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、期限を付さない、息の長い募金活動することとしています。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

北大フロンティア基金情報	14,621件 2,715,461,734円
基金累計額（4月30日現在）	教職員の寄附率 30.5%（1,182件／3,878人）

4月のご寄附状況

法人等6社、個人275名の方々から10,000,455円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいているの方々のご芳名、総合博物館への銘板の掲示、感謝状の贈呈について掲載させていただきます。（五十音別・敬称略）

寄附者ご芳名（法人等）

アルファどうぶつ病院, 日本精工株式会社, 医療法人社団皮膚科耳鼻咽喉科 わたなベクリニック, 北海道ガス株式会社, ホライゾンインベストメントジャパン合同会社, 宮の森アニマルホスピタル, リンクス動物病院

寄附者ご芳名（個人）

合川 正幸	東井 泰造	蛇川 雄司	安斎 隆	伊賀 進	伊藤 晃	伊藤 信彦	入澤 秀次
上田 敦	内田 一郎	浦田 蘊	江木 博	太田 利男	大宮 英男	沖野 光威	沖藤 典子
小内 透	小原 大和	角田 和夫	金川 眞行	川畑 裕司	菊地 孝司	岸並 正憲	北澤 馨
北野 溥	木村 俊郎	黒柳 雄二	乗原 幹典	小島 立一	小村三樹夫	近藤 哲也	斎藤 昭禎
斉藤 久	榊原 敬	佐藤 耕太	佐藤 制一	佐藤 雅夫	佐野 國臣	佐野大二郎	篠原 虔章
柴田 祐次	清水 孝洋	白井 法	白倉 恒夫	住本 光隆	瀬名波栄潤	高田 迪允	高橋 光彦
高松 勝彦	竹田洋一郎	玉置喜平次	千田 浩三	土家 琢磨	寺澤 睦	土井孝四郎	戸尾祺明彦
富田 初	豊田 威信	中田 禾穰	中野 憲明	中村 博	楢村 郁雄	新関 久男	新妻 徹
樋田 成二	平位 和溥	福士 雄幸	福地 光男	藤井 賢彦	藤波 富次	藤野 敬士	帆足 建三
星野 謙蔵	馬島 力	松崎 貞夫	松村 米紘	松山 繁夫	三宅 博子	向井 承子	矢尾板 清
矢ヶ崎啓一郎	安田 環	山内 隆嗣	山口 正雄	山崎 英氣	山崎 道夫	山崎 芳永	吉田 広志
吉村 孝一	渡辺 弘子						

銘板の掲示（20万円以上のご寄附）

（法人等）

日本精工株式会社，医療法人社団皮膚科耳鼻咽喉科 わたなベクリニック，北海道ガス株式会社，
ホライゾンインベストメントジャパン合同会社，宮の森アニマルホスピタル

（個人）

東井 泰造，伊賀 進，菊地 孝司，木村 俊郎，栞原 幹典，小村三樹夫，佐藤 雅夫，富田 初，新妻 徹

感謝状の贈呈



北海道ガス株式会社様（平成25年4月24日）



矢ヶ崎 啓一郎様（平成25年4月24日）

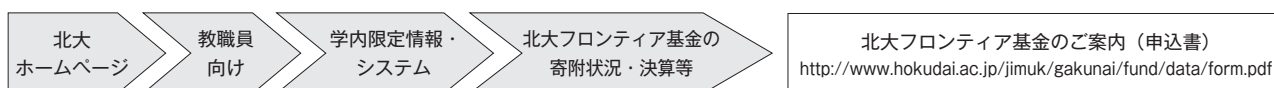


富士フィルムメディカル株式会社様
（平成25年4月25日）

ご寄附のお申し込み方法

① 給与からの引き落とし

申込書は、本学ホームページの「学内限定情報・システム」からダウンロードし、ご記入の上基金事務室に提出してください。



② 郵便局または銀行への振り込み

基金事務室にご連絡ください。払込取扱票をお渡します。

③ 現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、事務局財務部経理課収入担当にご持参ください。申込書は、本学ホームページから上記①の要領でダウンロードしてご記入いただくか、各部署事務担当及び事務局財務部経理課収入担当にご用意していますので、ご利用ください。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ 基金事務室（事務局・学内電話 2017）

（総務企画部広報課）

「日本語研修コース」入学式を挙行



入学式での集合写真

4月入学の「日本語研修コース」入学式を、4月9日（火）午前9時30分から、国際本部大会議室において行いました。

本コースは大使館推薦の外国人留学生に対して、大学院進学前の予備教育として開設されている6か月間の研修コースです。今回本コースには、研修修了後に帯広畜産大学に進学する1名を含む11か国13名の留学生が入学しました。

入学式では、最初に来賓の方々や教員の紹介が行われた後、留学生一人ひとりの名前が読み上げられ、学生はそれぞれ起立し、来賓の方々や教員、他の学生に向かって挨拶をしました。その後、杉浦秀一留学生センター長からの祝辞がありました。初めは緊張気味

だった学生たちも、最後の写真撮影時にはすっかりリラックスした表情になっていました。

入学式終了後、入学生は学術交流会館に移動し、国際本部主催の新規渡日外国人留学生のためのオリエンテーションに参加しました。オリエンテーションの資料は、本学のロゴのついたリストバンド型のUSBメモリによりデータ配布され、学生は嬉しそうにリストバンドを腕にはめていました。オリエンテーションでは、大学での事務手続き等の説明のほか、各団体による活動案内や札幌北警察署による交通安全や防災についての案内などがあり、学生たちは熱心に聞き入っていました。

（国際本部国際支援課）



学生の挨拶



杉浦センター長による祝辞

■ 部局ニュース

工学院で初のダブルディグリー取得者が誕生

工学院では、平成22年7月6日(火)に締結したポーランド・AGH科学技術大学との「ダブルディグリープログラム*に関する覚書」に基づいた博士号学位取得プログラムにより、平成25年3月25日(月)に本学学生としては初めてのダブルディグリー取得者が誕生しました。

被授与者である土屋真悟さんは平成22年4月に工学院博士後期課程材料科学専攻に入学した後、本プログラムに参加し、在学中は両大学に所属し、双方の大学から教育、研究指導を受けました。

既にポーランド・AGH科学技術大学からは平成24年10月に学位を授与されており、本学からの学位授与をもって、ダブルディグリー取得者となりました。

これは、プログラムとしても、初の学位授与となります。土屋真悟さんに

は、今後、本プログラムで培った知識と経験を活かし、国際的に活躍されることを期待しています。

なお、本プログラムには、今後両大学から各1名が参加予定であり、本学院ではタイ・アジア工科大学との修士号学位取得プログラムも実施しています。

これからも多くの学生がプログラムへ参加し、ダブルディグリーの取得を目指していただきたいと思っています。

*ダブルディグリープログラムとは

大学間交流協定に基づく学生交流の一環として、本学と協定大学との間で結ばれた教育プログラムに従い、両大学の学生がそれぞれの大学に在籍しながら、教育及び研究指導を両大学から受けることにより、それぞれの大学から学位を取得するプログラム。

(工学院・工学研究院・工学部)



馬場直志工学院長から学位を授与される土屋さん



研究室の松浦清隆教授とともに

工学研究院で四大学工学系人材交流プログラムキックオフミーティングを開催

4月6日(土)、工学研究院において大阪大学、東京工業大学及び名古屋大学の各工学系研究科長等が出席し、四大学工学系人材交流プログラムキックオフミーティングが開催されました。

本プログラムは、教育、研究、組織運営のリーダーとして期待されている若手教員を対象に、4大学の相互交流を通じて人材の育成及び参加組織間での知の共有化・参加組織の共進化を実現することを目的としています。

従来は、大阪大学、東京工業大学及び名古屋大学の3大学で行われていたプログラムであり、今年度から本学も参加することになりました。

当日は、はじめに馬場直志工学研究院長から開催の挨拶と本学が参加することに至った経緯の説明があり、大阪大学からは本プログラムの趣旨説明、東京工業大学からは新たな教員育成方法となる次世代工学系人材育成コア構想について説明がありました。その後、

各大学からそれぞれの工学系の紹介と本プログラムへの期待が述べられた後、今後の人材交流の進め方について意見交換を行いました。

4大学では今後、本プログラムに関する協定書を締結し、来年度からの同プログラムによる派遣(原則3年間)希望者を募ることとしています。

(工学院・工学研究院・工学部)

経済学研究科で、ワルシャワ経済大学＝北海道大学 ジョイントワークショップを開催

経済学研究科では、3月26日(火)、経済学研究科棟会議室でワルシャワ経済大学＝北海道大学ジョイントワークショップを開催しました。「ポーランドの『流通革命』：『生協王国』北海道への教訓」を共通論題に、経営史学会北海道ワークショップとも共催しました。

ワルシャワ経済大学からドミニカ・ミロンスカ准教授（国際経営マーケティング研究所）を招聘し、ポーランドの「流通革命」を報告していただいた後、経済学研究科 高井哲彦准教授が日本の流通史を対比的に報告しました。1989年の社会主義政権崩壊後、外資系大型量販店がポーランドを席卷し、伝統的小売業の多くが崩壊したという経緯は、駅前シャッター街を知る北海道の研究者の学際的な関心を集め

ました。そこで経済学研究科の研究者・学生に、他大学・研究科の研究者も加わり、活発な意見交換が行われました。今回の学術交流は、社会主義時代に締結した協定を時機に合わせて見直す好機にもなりました。

(経済学研究科・経済学部)



講演するワルシャワ経済大学
准教授 ミロンスカ氏



参加者による記念撮影

経済学部がメンタルヘルス講演会を開催

経済学部では、4月5日(金)午後3時から、人文・社会科学総合教育研究棟W103講義室において、新入生オリエンテーションの一環として、経済学部1年生と総合入試から経済学部に進級した2年生を対象としたメンタルヘルス講演会を開催しました。講演は、教育学研究院准教授で、「学生相談室何でも相談員」である渡邊 誠氏により行われ、「ストレスとは何か」、「学生生活の中でストレスを引き起こすもの」、「ストレス対処法」などについて、豊富な事例を交えて説明がありました。

具体的には、(1) 大学入学という変化の中で辛いことだけでなく楽しいことにもストレスが含まれていること

があり、一つひとつは小さなストレスでも一度に多く抱えてしまうと耐えられなくなることがある、(2) ストレス対処として様々な方法があるが、最も重要なのは睡眠であり、上手く眠る方法を見つけることが大切である。また、互いに支え合う気持ちが力になる、(3) 本学には様々な相談機関があるのでぜひ活用してください、などの説明がありました。

当日は200名近い学生及び教職員が参加し、非常に真摯にメンタルヘルスの問題をとらえ、熱心に講演に聴き入っていました。

(経済学研究科・経済学部)



講演する教育学研究院 渡邊准教授



熱心に講演を聴く学生

工学部が第2回心のケアに関する講習会を開催

1月24日（木）午後6時15分から工学部アカデミックラウンジ3において、工学系部局なんでも相談室カウンセラーの石原一人先生による「第2回心のケアに関する講習会」を開催しました。

講習会では「メンタル不調者への対応」というテーマで、心の悩みを抱えた人をケアするための対応方法について講演いただき、学生・教職員合わせて40名の参加がありました。

今回の講習会は、教職員や学生から以前より要望のあった業務や講義に影響なく参加出来る時間に実施して欲しいという声に応え、夕方以降の時間帯に設定したこともあり、前回に比べて教職員の参加が多く、講演終了後には活発な質疑応答も行われました。

講習会終了後のアンケートは、参加者40名に対して39件と非常に回収率が高く、また、講習会参加の感想としても「面白かった」、「やや面白かった」との回答が多く寄せられ、心のケアに対する関心についても「非常に深まっ

た」、「深まった」、「やや深まった」が9割以上もあり、講習会参加者の心のケアに対する関心の高さが感じられました。

参加者からは「話の聴き方、接し方の大切さが勉強になった」、「『カウンセリングマインド』というのは難しい」、「傾聴法の内容がとても参考になった」、「メンタル不調者の抱える問題に巻き込まれないようにすることの重要性が理解できた」、「『安全（健康）配慮義務』による切り口は使えるかもしれないと思った」等の感想や、印象に残った言葉として「聴き方の3つのステージやカウンセリングは『私はこう思う』を導く」、「普段から風通しのよい人間関係作りを心がける」、「聞くと聴くの違い」、「精神症状と同じくらい身体症状が出るということ」等、また「学生の悩みの特徴や、教員が特に気をつけるべき点などについて聞きたい」、「具体的な例をあげての演習（特に大学特有の例）を含めてほしい」等の要望が寄せられました。



メンタル不調者への対応について話す石原先生



受講風景

工学部では、今年度以降も心のケアに関する講習会を開催していく予定です。

（工学院・工学研究院・工学部）

工学部が救急救命講習会を開催

2月15日（金）13時30分より工学部物理工学系大会議室において、財団法人札幌市防災協会から講師を招き、救急救命講習会を開催しました。

この講習会は、怪我をする、あるいは急病で倒れる等の状況に接した場合、救急隊が到着するまでの間、その場に居合わせた人が心肺蘇生法など応急手当を行うことによって、傷病者の大切な命を取り留めることができるよう、必要な知識を習得することを目的として開かれたものです。

工学部では、10箇所にAED（自動体外式除細動器）を設置しており、どこであってもおよそ5分以内にはAEDを傷病者の元へ届けることができるようになっています。

講習会では、17名の参加者が2グ

ループに分かれ、異物の除去法、心肺蘇生法、AEDの使用法等を学び、終了後全員が「普通救命講習修了証」を授与されました。

参加者からは、「胸骨圧迫（心臓マッサージ）はとても体力を使うものだと知って驚いた」、「救急車が来るまでずっと続けるには、何人かで交代してやらないと無理だと思う」、「一人では数分しか続けられない。そのためには多くの人が心肺蘇生法を習得する必要があるのではないか。」などの感想がありました。

工学部では、今年度以降も救急救命講習会を開催していく予定です。

（工学院・工学研究院・工学部）



人工呼吸の様子



胸骨圧迫の様子

水産学部3年生キャンパス移行式を実施

水産学部3年生の函館キャンパスへの移行に伴い、4月2日（火）午前9時30分から、平成25年度キャンパス移行式を実施しました。

これまでは2年生の10月にキャンパスを移行していましたが、総合入試導入によるカリキュラム改編により、移

行時期が3年生の4月に変更になってから初めての実施でした。

式には、嵯峨直恆水産学部長、副研究院長、評議員、各学科長、教務委員長、学生委員長、各学科担任らが出席し、学部長から204名の移行者へ、水産学部と函館における学生生活の心得

と激励があった後、出席者が紹介されました。

移行式終了後は、全体ガイダンス及び学科別のガイダンスを実施しました。

（水産科学院・水産科学研究院・水産学部）



移行生を激励する嵯峨学部長



式終了後にポニーと触れ合う移行生

水産科学院・水産学部でTA研修会を開催

4月4日（木）に函館キャンパス及びその近郊の大学院学生を対象にした水産科学院・水産学部「ティーチング・アシスタント（TA）研修会」を実施しました。水産科学院・水産学部では、この「TA研修会」を「大学の短時間勤務職員採用時の研修」と位置づけて、原則受講しないとTAを行うことはできないことにしています。

研修会の前半は、（1）大学教育の

基礎、（2）TAについて（全般、実験実習、職業）の2つのレクチャーを行いました。大学教育の成立ち、シラバスの説明、実験実習におけるTAとしての心構え・役割と教員との関係、大学の短時間勤務職員としての留意事項や安全衛生に関する知識を深めました。研修の後半は、参加者がTAを行う予定の学科ごとに分かれて、TAが遭遇しそうな事柄に対してどう対処す

るかのケーススタディとプレゼンテーションのグループ学習を行いました。

当日はTA予定者87名の参加があり、グループ学習では、参加者が相互で、あるいは教員とTAの意見交換をすることで、TAとしての責任を改めて意識できたようです。

（水産科学院・水産科学研究院・水産学部）

文学研究科FD研修会「セクシャル・ハラスメントの防止等のために文部科学省職員が認識すべき事項についての指針」を開催

文学研究科・文学部では、かねてより部局内に学生相談室を設置する等の対策によって、さまざまなハラスメント問題への対応を強化してきました。平成24年度も、3月4日(月)に人文・社会科学総合教育研究棟W409において、平成23年度に引き続き、ハラスメント問題をテーマにしたファカルティ・ディベロプメント(FD)研修会を開催いたしました。

本年度は、講師に道央法律事務所の弁護士である上田絵理氏をお招きし、「大学におけるセクハラ・パワハラをどのように防いでいくか」と題してご講演いただきました。

上田弁護士から最初に、近年におけるいわゆるセクハラ、パワハラ、また

アカデミック・ハラスメントの現況をお話いただいた後、「セクシャル・ハラスメントの防止等のために文部科学省職員が認識すべき事項についての指針」等に基づいて、セクシャル・ハラスメントやアカデミック・ハラスメントとはどういうものかということについて詳しく解説していただきました。さらに、ハラスメント関連の裁判の事例をいくつかとりあげて、より具体的にハラスメント問題の実態を示していただきました。そして、さまざまなハラスメントの加害者とならないために普段から注意すべき点、あるいは、万が一加害者となった場合の責任や被害者の救済方法などについても明快にご教示され、最後に我々一人ひとりの

意識改革の重要性をご指摘いただきました。

講演には40名あまりの教職員や専門研究員らが参加し、熱心に耳を傾けておりました。講演後、短い時間ではありましたが、聴衆からいくつか率直な質問が出され、有意義な意見交換のひと時をもつこともできました。

本研究科・学部では、今後もこのような研修会等を積極的に開催していくことによって、さまざまなハラスメントの防止に真摯に取り組むとともに、よりよい充実した教育研究環境の構築に努めていきたいと考えております。

(文学研究科・文学部)

平成25年度薬学実務実習開始セレモニーを挙行

薬学部では、5月7日(火)午前8時45分より、平成25年度薬学実務実習開始セレモニー「臨床現場へあがるための心得」を挙行しました。

この式は、薬学部が6年制の薬学科(薬剤師を養成)と4年制の薬科学科(薬を作り出すための研究者や技術者を養成)の2学科制となってから4回目の実務実習(病院実習・薬局実習)に、薬学科5年次生が臨むにあたって実施したものです。学生は、実習中のユニフォームとなる真新しい上下の白

衣に身を包み、引き締まった面持ちで参加していました。

式には、南 雅文薬学部長、菅原満教務委員長、実務実習担当教員らが出席し、実務実習の趣旨や学生に期待すること、昨年度実施された実務実習をふまえての注意点などとともに、激励の言葉が伝えられました。

受け入れ施設からは、北海道大学病院薬剤部 山田武宏薬剤部副部長、株式会社インファーマシーズ 富樫聖子運営研修部課長、株式会社ツルハ

吉町昌子調剤運営部長が出席し、臨床の現場・患者さんに直接接する場で実習に臨む際の心構えなどが伝えられ、学生たちの神妙に聞き入る様子が見られました。

式の終わりには、南薬学部長から学生一人ひとりへ実習中着用するネームプレートが手渡され、病院・薬局合わせて5か月に及ぶ実習への壮行となりました。

(薬学研究院・薬学部)



ネームプレートを手渡す南薬学部長



株式会社インファーマシーズ 富樫運営研修部課長の挨拶



株式会社ツルハ 吉町調剤運営部長の挨拶

脳科学研究教育センター発達脳科学専攻の開講式を挙行



新しく加わった履修生と基幹教員

脳科学研究教育センターでは、4月2日（火）午後4時30分から本学エンレイソウ第一会議室において、今年度入学した履修生の開講式を行いました。

吉岡充弘センター長（医学研究科教授）から、祝辞とともに発達脳科学専攻の特色ある教育体制や研究指導内容について説明があり、新入生は、パー

チャル専攻の特徴を活かした大学院教育に、大きな期待を示していました。引き続き、田中真樹センター教務専門委員会委員長（医学研究科教授）から、修了要件についての説明があり、「所属学院・研究科の課程のみを修了する大学院生に比べ、より多くの単位を修得する必要があり、さらには当セン

ターの合宿研修や発表会等で研鑽を積むことになり大変ではあるが、ここで学んだことは必ず将来の自信につながるので頑張っていたきたい」との激励がありました。また、出席した基幹教員から、祝辞とそれぞれの担当講義及び研究内容の紹介がありました。

開講式に引き続き、同会場にて新入生歓迎交流会が行われ、参加者は所属部局を超えて情報交換を楽しんでいました。

本専攻には、今年度11名の履修生（修士課程7名、博士課程4名）が加わり、全体では24名の履修生が在籍することになります。

（脳科学研究教育センター）

総合博物館で企画展示「北のすみれ」を開催



展示の様子

総合博物館では、標記展示を4月16日（火）から5月12日（日）まで開催しました。季節を先取りして北海道のすみれ属植物を解りやすく紹介し、かつ最新の植物学的知見も含んだ展示を目指しました。

展示の主要部分は、当館ボランティアであり30年近く植物画を描いてこられた船迫吉江さんによる実寸大のすみれの植物画50点です。当館植物標本庫に保管されている戦前の千島やサハリン産タイプ標本から復元され、描かれ

たものもありました。花の分解図や托葉など重要な標徴形質も描きこまれており、植物学的にも正確であり来館者にも特に興味を持って見ていただけたと思います。

さらに、北海道とその周辺地域で戦前からごく最近まで収集されてきたすみれの押し葉標本も展示しました。また、テーマ解説パネルで「すみれ」の語源、北海道における地理分布や、シカによる食害問題、花粉形態、最新のDNA解析による系統といった研究トピックを紹介し、日本と北海道のすみれ属植物リストや北海道のすみれ属植物のカラーライドショーなどで、その多様性をご理解いただけたかと思えます。

展示にあたっては、北方山草会や博物館ボランティアなど、多くの方にご協力いただきました。

（総合博物館）

旧制大学期の卒業記念写真帖を大学文書館で受贈

大学文書館では、旧制大学期の卒業記念写真帖を、4月17日（水）に2点受贈しました。

1点は、伊藤六郎（農学実科1930年卒業）旧蔵写真帖です。ご息女の鈴木美智子氏よりご寄贈いただきました。第一農場での根菜栽培や第二農場での家畜の飼養など、農学実科生徒が活き活きと実習している様子が写し撮られ

て、貼付されています。

もう1点は、笠原篤三（工学部土木工学科1935年卒業）旧蔵写真帖です。卒業時に発行された証書「北海道帝国大学工学部試験合格科目及論文題目証明書」と共に、ご子息の笠原 篤氏よりご寄贈いただきました。構造力学・混凝土工学などの講義風景や、架橋・鉄道・治水関係の見学のほか、昼食・

囲碁・水泳・読書など、当時の学生生活を知り得る写真も貼付されています。

大学文書館では、受贈資料を大切に保存すると共に、デジタル化を進めて写真画像を利用に供し、展示・資料見学会などで活用していきます。

（大学文書館）



南瓜の収穫（第一農場）



羊の毛刈り（第二農場）
後列右端が伊藤六郎



混凝土工学の実習
前列左4番目が笠原篤三



石狩川橋梁（札沼線）の架橋工事見学

■お知らせ

ProSPER.Net博士課程学生向けサマースクール 「Young Researcher's School (YRS)」の募集について

2008年6月に本学にて発足したProSPER.Net（アジア環境大学院ネットワーク）では、28の加盟大学の持ち回りにて毎年、約10日間のサマースクールを開催しています。2013年度は、タイの3大学の共催により、「持続可能な開発のための水と生物多様性におけるパートナーシップ」をテーマに9月9日（月）から20日（金）の日程で開催されます。今回は2012年度のスクール参加者の報告を寄せて、より多くの皆様にProSPER.Netの活動に関心を持っていただけたらと思います。なお、2013年度の募集要項についてはHUISD（<http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/huisd/jp/activity/6045/>）をご覧ください。

（国際本部国際連携課）

ProSPER.Net Young Researcher's School 2012参加報告

まず初めに、このような機会を頂けたことを感謝いたします。私の体験談から少しでも多くの日本人学生がProSPER.Net YRSに応募してみようかなと思って頂ければ幸いです。

私は現在、医学研究科 微生物学講座 病原微生物学分野にて人獣共通感染症に関する研究を行っています。この人獣共通感染症は世界中に分布していますが、特に熱帯地域における住民への脅威は大きく、致死的な感染症も少なくありません。その反面、これらの多くは予防可能であり、診断・治療の流れさえスムーズであれば救命の可能性があるのも事実です。また、古今さらに活発化する国際的な物流及び人口流動は感染症の移動に対するリスクを常に伴っているため、発生地で感染症制御、感染症の越境に対する制御の必要性は年々高まっています。しかしながら一つの学術分野だけでは対処が困難を極める問題でもあるため、総合学際的な対応、またサステナビリティサイエンスと呼ばれる学問に興味を持ち始めました。その折に今回の若手研究者向けセミナーに参加することができ、貴重な経験ができましたのでご報告いたします。

2012年度Summer schoolのテーマは“Building a Resilient Society in Asia”，『アジアにおける災害に負けない地域社会づくり』を掲げてインドネシア、ジョグジャカルタのガジャマダ大学にて開催されました。10日間しか日程が許されない中、非常に綿密なプログラムが組まれておりましたが、幸いにも私達は全課程を修了することができ、現地のコーディネーターの尽力に感謝が尽きる事はありませんでした。具体的には座学1日、見学1日のセットを繰り返し、事前に学んだ内容がどのように現場で生かされているのか、繋がりよく学べる構成になっていました。インドネシアという国は数千の島からなる国で、非常に多文化多民族国家であり、中央政府がひとまとめに統制を取るのには難しいということから、州による自治が進められています。反面、災害によって大きな被害がある地域に発生した場合、速やかに国からの援助を受けられないという点も指摘されています。そのような統制バランスの中で、地域住民が主

体となって、火山の噴火被害にあった地域での復興活動、貧困から立ち上がるための地域活性化及び職機会の創出、そして環境と調和した生活を目指した循環型農業、有機廃棄物の再利用などがどのように行われているのかを知識として吸収し、実際に目にする事で体験しました。それらを踏まえて、参加者には自分の研究に関する5分間の発表が課され、最終日にはコンペティションが行われました。発表以外にも課外活動のレポートや、各講義のファシリテーター、また担当講義のレポートと概要発表、またYRS終了後のレポートなど数々の課題が出されます。

さらに、レクリエーションもしっかりと予定に組み込まれており、ジョグジャカルタの観光地巡りや、伝統芸能を楽しむ機会も与えられました。参加者のマネージャー役を担ってくださった現地の担当者の方々に感謝の言葉が尽きることはありません。またこれらは個人で回るのではなく、他の参加者と一緒に行動します。講義中とはまた違って、リラックスした中で弾む会話ほど楽しいものはありません。これらのオフィシャルなレクリエーション以外にも、毎日の講義後は自由時間のため、課題さえ終わらせればホテルの外へ現地の空気を感じに出かけるもよし、ホテル内の施設を利用して楽しむもよし、他の参加者と何時間も話し込むもよし、自己責任の範囲内でアフターファイブを楽しむ事は可能です。勉強しに来たのだからと部屋に閉じこもって机にかじり付くのではなく、このような自由時間を上手く活用して現地の人々の生活に触れ、彼らの文化を理解しようと務めることの方がよほどこのYRSの目的に合うのではないかと個人的には思うところです。また同時に他の国からの参加者と議論をかわし、談笑することも非常に有意義な時間を過ごせたと感じています。

サステナビリティサイエンスは総合学際的な学問であると初めに述べましたが、この総合的な学問であるからこそ、非常に複雑で個々の学問のようにはっきりとしたものが私には見えませんでした。また、このサステナビリティサイエンスを一人の学者が専門として極めるという事は、独りで全学問を極めるということであり、人間一人の人生内で

成し遂げるには限りなく不可能に近いと感じておりました。

しかし、独りで立ち向かうには大きすぎる壁でも、他の人と協力すれば打ち破ることができるように、この総合学際的な学問はどうやって他の専門家と協力して行くか、協力できるのかを明確化していくもの、さらには協力体制を展開させるためのファシリテーターを養成するものだというのを今回のYRSで気づかされました。全く異なる分野、他国の研究者と密な時間で集中的な交流を行う事で、相手の研究分野と自分の研究分野の係わり合い、共通点、新しい視点の提案など、同じ分野の仲間同士では気づく事のないような事を多く発見できたのです。

毎年異なるテーマを掲げてYRSは開催されますが、基本はこのサステナビリティサイエンスに基づくものです。来年度のテーマが自身の研究には直接関係無いと思っても、参加したいと思う気持ちがあれば是非、まず応募してみてください。一見関係無いことも、とんでも無いところで繋がっていくのがこの学問です。むしろ全く関係の無いように見える分野の研究者が参加し、新しい視点を加えて議論を重ねることにより、思いも寄らない可能性が浮かび上がる、その方がYRSにとっては有意義な参加者になると思います。



リサイクル施設を併設するGamping Fruit Marketにて

YRSで出会った仲間とは今でも交流が続いています。研究者同士として、友人として、2週間にも満たない期間でも、苦楽寝食を共にした仲間として。

決して英語が話せなくとも大丈夫とは言いません。上手く話せなくとも、自分の考え、自分の意見を伝える努力を惜しまないこと、また怖じけず、変に構えず、素直に分からないことは聞く好奇心の塊を持っていれば必ず相手の方も耳を傾け、より多くの情報を与えようと応えてくれます。偶然も必然も機会は機会ですから、是非この記事を目にした、または私のように、たまたまProSPER.Netのホームページを見たなど、機会を得たならば是非生かしてみてください。Give it a shot to get the show on the road!

最後に、参加前から参加後までサポートして下さった国際本部の方々、現地コーディネーターの皆様、国連大学のコーディネーターの皆様、講師の皆様、それからYRS 2012への参加者の皆様、全員のお名前をここに挙げられないことは残念ですが、言葉では言い表せないほど誠にお世話になりました。関係者の皆様に心から深い感謝の意を表します。

塩川 愛絵（医学研究科博士後期課程3年）



循環型自立コミュニティのBumiLangit Instituteにて

北海道地区福祉共同事業契約宿泊施設の開設

文部科学省共済組合北海道大学支部では福祉共同事業の一環として、毎年道内各地の宿泊所・保養所と利用契約し、宿泊費の一部負担を実施していますが、平成25年度においても次のとおり実施しています。

なお、予算の関係上、割当枚数に達した場合は、契約期間中でも利用券発行を停止しますので、ご了承ください。

1. 契約宿泊施設 宿泊施設一覧表のとおり
2. 契約期間 平成25年6月1日(土)～平成26年2月28日(金)
3. 共済組合負担額 共済組合負担額 利用者1人1泊につき1,500円補助
4. 利用方法 利用券の発行を受ける場合には、利用券発行申請書を所属部局の担当へ提出してください。
5. 利用資格者 組合員及びその被扶養者(小学生以上)とします。ただし、出張の際の利用はできませんので、ご注意ください。また、一度につき、3泊以上の利用はご遠慮願います。

平成25年度 宿泊施設一覧

施設名	所在地	電話
KKRホテル札幌	〒060-0004 札幌市中央区北4条西5丁目	011-231-6711
札幌ガーデンパレス	〒060-0001 札幌市中央区北1条西6丁目	011-261-5311
ガトーキングダムサッポロ	〒002-8043 札幌市北区東茨戸132	011-773-2211
定山溪ビューホテル	〒061-2302 札幌市南区定山溪温泉東2丁目	011-598-3223
定山溪鶴雅リゾートスパ 森の譚	〒061-2302 札幌市南区定山溪温泉東3丁目192番地	011-598-2671
KKRはこだて	〒042-0932 函館市湯川町2丁目8-14	0138-57-8484
啄木亭	〒042-0932 函館市湯川町1丁目18-15	0138-59-5355
望楼NOGUCHI 函館	〒042-0932 函館市湯川町1丁目17-22	0138-59-3556
グリーンピア大沼	〒049-2192 茅部郡森町赤井川229	01374-5-2277
八雲温泉 おぼこ荘	〒049-3128 二世郡八雲町鉛川622	0137-63-3123
洞爺観光ホテル	〒049-5721 虻田郡洞爺湖町洞爺湖温泉33	0120-17-1085 0142-75-2111
洞爺サンパレス	〒049-5731 有珠郡壮瞥町字洞爺湖温泉7-1	0142-75-1111
湖畔亭	〒049-5721 虻田郡洞爺湖町洞爺湖温泉7-8	0142-75-2211
名水亭	〒052-0316 伊達市大滝区北湯沢温泉町300-2	0142-68-6677
第二名水亭	〒052-0316 伊達市大滝区北湯沢温泉町300-7	0142-68-6677
ホロホロ山荘	〒052-0316 伊達市大滝区北湯沢温泉町34	0142-68-6677
登別ランドホテル	〒059-0592 登別市登別温泉町154	0143-84-2425
御やど清水屋	〒059-0551 登別市登別温泉町174	0143-84-2145
石水亭	〒059-0596 登別市登別温泉町203-1	0143-84-2255
ニセコランドホテル	〒048-1511 虻田郡ニセコ町字ニセコ412	0136-58-2121
ルスツリゾートホテル	〒048-1711 虻田郡留寿都村字泉川13	0136-46-3331
国民宿舎雪秩父	〒048-1321 磯谷郡蘭越町字湯里680	0136-58-2328
かんぼの宿 小樽	〒047-0192 小樽市朝里川温泉2丁目670	0134-54-8511
休暇村 支笏湖	〒066-0281 千歳市支笏湖温泉	0123-25-2201
しこつ湖鶴雅リゾートスパ 水の譚	〒066-0281 千歳市支笏湖温泉	0123-25-2211
アルファリゾート・トマム	〒079-2204 勇払郡占冠村字中トマム	0167-58-1122
サホロリゾートホテル	〒081-0039 上川郡新得町狩勝高原	0156-64-7111
国民宿舎あしべつ	〒075-0035 芦別市旭町油谷1	0124-23-1155
芦別温泉スターライトホテル	〒075-0035 芦別市旭町油谷1	0124-23-1155
大雪山白金観光ホテル	〒071-0235 上川郡美瑛町白金温泉	0166-94-3111
層雲閣ランドホテル	〒078-1792 上川郡上川町字層雲峡温泉	01658-5-3111
朝陽亭	〒078-1795 上川郡上川町字層雲峡温泉	01658-5-3241
朝陽リゾートホテル	〒078-1701 上川郡上川町字層雲峡温泉	01658-5-3911
ホテル日航ノースランド帯広	〒080-0012 帯広市西2条南13丁目1番地	0155-24-1234
ホリデーイン ホテル十勝川	〒080-0263 河東郡音更町十勝川温泉南16丁目2	0155-46-2555
かんぼの宿 十勝川	〒080-0262 河東郡音更町十勝川温泉北9丁目1	0155-46-2141
ニュー阿寒ホテル	〒085-0467 釧路市阿寒町阿寒湖温泉2丁目8-8	0154-67-2121
鶴雅ウィングス	〒085-0467 釧路市阿寒町阿寒湖温泉4丁目6-10	0154-67-4000
あかん鶴雅別荘 鄙の座	〒085-0467 釧路市阿寒町阿寒湖温泉2丁目8-1	0154-67-5500
阿寒の森ホテル 花ゆう香	〒085-0467 釧路市阿寒町阿寒湖温泉1丁目6-1	0154-67-2500
KKRかわゆ	〒088-3465 川上郡弟子屈町湯温泉1-2-15	015-483-2643
知床第一ホテル	〒099-4351 斜里郡斜里町知床ウトロ香川306	0152-24-2334
サロマ湖鶴雅リゾート	〒093-0216 北見市常呂町栄浦306-1	0152-54-2000
旅館塩別つるつる温泉	〒091-0163 北見市留辺蘂町滝の湯201	0157-45-2225
北天の丘 あばしり湖鶴雅リゾート	〒099-2421 網走市呼人159	0152-48-3211

(文部科学省共済組合北海道大学支部)

インフォメーションセンター「エルムの森」で企画展示を開始

本学正門横インフォメーションセンターは、学内の概要、各種広報誌等の閲覧・配布や広報ビデオの上映などのほか、全学のイベント情報や学会の開催状況をはじめとして、幅広い問い合わせに対応できる広報センターです。

運営は、嘱託職員1名、事務補助員2名のほか、外国人留学生を若干名配置し、年末年始及び全学停電日以外の毎日、外国人を含む本学来訪者の窓口として活動しています。

同センターの昨年度の利用者は約15万6千名で、1日当たり437名の来訪者があり、ピークの8月の訪問者は2万9千名余り（約935名/日）です。

この度広報課では、たくさんの訪問者がある地の利を生かして本学の情報を発信するために、同センターに企画展示スペースを設営しました。

同スペースには、60インチ型大型ディスプレイ、メディアプレイヤー、ショーケース及びポスターパネルを用意し、各部局の最新の取り組みの紹介、研究プロジェクトの紹介や研究成果等による展示物の公開等、多様な情報発信を可能としました。

初の企画展示として、5月7日（火）から北方生物圏フィールド科学センターとの共同企画展示を開始しました。

同センター和歌山研究林では、同林在勤職員が余暇時間等を利用して間伐材等から各種木工製品を製作しています。今回は、木工製品をオリジナルグッズとして販売しながら、和歌山研究林の紹介動画の放映、ポスターの展示をしています。

大型ディスプレイの前には長いすを設置し、約6分の動画をゆっくり鑑賞することができます。

今後も、各部局等の協力を得ながら、様々な情報発信を行っていく予定です。

（総務企画部広報課）



企画展示スペース全景



各種木工オリジナルグッズ

■ 諸会議の開催状況

役員会（平成25年4月9日）

- 報告事項・総長の職務代理の指名について
- ・役員補佐及び副理事の任命について
 - ・平成24年度実施法科大学院認証評価結果について
 - ・平成25年度博士課程教育リーディングプログラムの申請候補プログラムについて
 - ・平成25年度学部入学者数について
 - ・平成25年度インターネット出願の実施状況について
 - ・理学研究科および水産科学研究科の廃止について
 - ・個人情報の管理について
-

教育研究評議会（平成25年4月16日）

- 議案・総長選考会議委員の選出について
- ・経営協議会の学外委員について
 - ・名誉教授の称号授与について
 - ・「現代日本学プログラム課程」の組織整備計画について
- 報告事項・役員補佐及び副理事の任命について
- ・平成24年度実施法科大学院認証評価結果について
 - ・大学間交流協定の新規締結等について
 - ・平成25年度博士課程教育リーディングプログラムの申請候補プログラムについて
 - ・平成25年度学部入学者数について
 - ・理学研究科および水産科学研究科の廃止について
 - ・科研費 研究成果報告書の提出について
 - ・寄附講座等の延長について
 - ・個人情報の管理について
 - ・学生の懲戒について
-

役員会（平成25年4月22日）

- 議案・「現代日本学プログラム課程」の組織整備計画について
- ・平成26年度特別経費事前説明事業について
- 報告事項・キャンパス・クリーン・デーの実施について
- ・超過勤務の縮減に向けた取り組みについて
 - ・総合複写サービスの入札結果について
 - ・自己収入の一層の拡大に向けた取組について
-

※規程の制定、改廃については、「学内規程」欄に掲載しております。

■ 学内規程

国立大学法人北海道大学事務組織規程の一部を改正する規程

（平成25年4月18日海大達第83号）

本年3月31日付けで大学院理学研究科及び同水産科学研究科が廃止されたことに伴い、所要の改正を行ったものです。（平成25年4月1日適用）

国立大学法人北海道大学公印規程の一部を改正する規程

（平成25年4月18日海大達第84号）

本年3月31日付けで大学院理学研究科及び同水産科学研究科が廃止されたことに伴い、所要の改正を行ったものです。（平成25年4月1日適用）

北海道大学大学院獣医学研究科附属動物病院規程の一部を改正する規程

（平成25年5月1日海大達第85号）

本学大学院獣医学研究科附属動物病院において徴収する診療料金を改めることに伴い、所要の改正を行うとともに、併せて規定の整備を行ったものです。

■ 研修

研修名：平成25年度北海道地区国立大学法人等初任職員研修（一般職）

開催期間：平成25年4月9日～平成25年4月11日

開催場所：学术交流会館第一会議室

研修目的：北海道地区国立大学法人等の職員としての心構えを自覚させるとともに、初任職員として必要な基礎的知識を付与することを目的とする。



「開講式」挨拶（山口 佳三 総長）



受講風景



「特別講話」（村田 直樹 事務局長）



「演習・グループワーク」(株式会社アムリプラザ)

(総務企画部人事課厚生労務室)

表敬訪問

国内

年月日	来訪者
25.4.9	札幌国際大学 学長 濱田 康行 氏
25.4.10	株式会社日立製作所 北海道支社 一行
25.4.18	社団法人北海道未来総合研究所 理事長 出村 克彦 氏
25.4.22	JFEエンジニアリング株式会社 北海道支店長 岸本 和一郎 氏
25.4.22	京都大学数理解析研究所長 森 重文 氏
25.4.22	北海道情報大学 学長 富士 隆 氏 北海道情報大学 常務理事・法人本部長 中居 聡士 氏
25.4.24	JR北海道ホテルズ株式会社 代表取締役社長 島田 修 氏
25.4.24	北海道大学国際婦人交流会



札幌国際大学 学長 濱田 康行 氏 (左側)



株式会社日立製作所 北海道支社 一行



社団法人北海道未来総合研究所
理事長 出村 克彦 氏



JFEエンジニアリング株式会社
北海道支店長 岸本 和一郎 氏



北海道情報大学 学長 富士 隆 氏 (右側)
北海道情報大学 常務理事・法人本部長 中居 聡士 氏 (左側)



京都大学数理解析研究所長 森 重文 氏



JR北海道ホテルズ株式会社
代表取締役社長 島田 修 氏 (右から2人目)

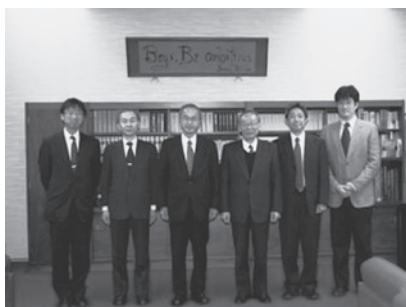


北海道大学国際婦人交流会

(総務企画部広報課)

海外

年月日	来訪者	目的
25.4.4	国立成功大学（台湾）Hwung-Hweng Hwung 学長	両大学の交流に関する懇談
25.4.10	駐日南アフリカ共和国大使館 ムベレ ノセシロ 全権公使	両国の交流に関する懇談
25.4.19	中華人民共和国駐札幌総領事館 許 金平 総領事	両国の交流に関する懇談



国立成功大学 Hwung-Hweng Hwung学長
(中央右)



駐日南アフリカ共和国大使館
ムベレ ノセシロ 全権公使 (中央)



中華人民共和国駐札幌総領事館 許 金平 総領事
(中央左)

(国際本部国際連携課)

■ 人事

平成25年4月1日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【部局長・施設長等】 学務部キャリアセンター長 (期間：平成27年3月31日まで)	小 柴 正 則	学務部キャリアセンター特任教授

平成25年4月15日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【技術職員等】		
水産学部附属練習船おしよろ丸甲板員	澤 田 光 希	採用
水産学部附属練習船おしよろ丸甲板員	平 尾 真 也	採用
北海道大学病院看護部看護師	戸 羽 小寿恵	北海道大学病院看護部准看護師
北海道大学病院看護部看護師	荒 井 梨 佐	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	安 藤 由莉亜	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	井 川 佳 世	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	池 田 雪 花	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	石 垣 希 恵	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	石 黒 未 恵	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	稲 上 樹 里	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	岩 城 麻 実	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	岩 木 柚香李	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	梅 内 郁	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	大 嶋 織 恵	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	太 田 知 佐	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	太 田 瑠 那	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	大 原 れ い	北海道大学病院看護部看護助手

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
北海道大学病院看護部看護師	小笠原 弥 耶	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	岡 田 麻 里	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	長 船 紀 穂	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	小 田 祐未子	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	柿 本 静 香	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	川 中 メ グ	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	工 藤 裕 花	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	小 崎 巧 実	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	小 島 実希子	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	後 藤 ゆりあ	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	小 堀 昂	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	齋 藤 綾 乃	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	佐 藤 知 弘	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	佐 藤 麗 王	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	相 馬 美 々	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	竹 内 希	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	立 木 夏 希	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	田 中 知 美	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	谷 川 真 紀	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	太郎田 遥 佳	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	傳 田 萌	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	富 山 夕 貴	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	仲 西 希 朝	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	那 須 翔 子	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	西 井 温 美	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	野 澤 茉 也	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	林 亮 介	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	平 田 彩 乃	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	福 士 彩 織	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	船 戸 早希子	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	堀 彩 香	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	堀 岡 愛 子	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	堀 籠 憂 聖	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	馬 渕 翔	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	三 井 順 子	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	三 浦 麻美子	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	三 上 美 香	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	宮 原 由里加	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	女 鹿 智 滉	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	本 井 愛 乃	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	山 田 結 奈	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	渡 邊 亜 美	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部助産師	門 脇 唯	北海道大学病院看護部看護助手
北方生物圏フィールド科学センター	阿 達 大 輔	採用

平成25年4月19日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【技術職員等】		
北海道大学病院看護部看護師	勝 原 優 希	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	佐 藤 美 里	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	志 賀 桜	北海道大学病院看護部看護助手

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
北海道大学病院看護部看護師	洪 井 友香里	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	永 井 里 枝	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	伴 由梨香	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	松 葉 有 貴	北海道大学病院看護部看護助手
(辞職)	伊 藤 崇 倫	北海道大学病院診療支援部理学療法士

平成25年4月22日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【技術職員等】 北海道大学病院看護部看護師	GANZORIG OCHGEREL	採用

平成25年4月30日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【嘱託職員】 (辞職)	樋 口 順 一	北方生物圏フィールド科学センター

平成25年5月1日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【経営協議会委員】 (期間：平成27年4月30日まで)	高 井 修	北海道副知事
【部局長】 大学院教育学研究院長 (期間：平成26年3月31日まで)	姉 崎 洋 一	大学院教育学研究院教授
【副研究院長】 大学院教育学研究院副研究院長 (期間：平成26年3月31日まで)	小 内 透	大学院教育学研究院教授
【教授】 大学院歯学研究科教授 大学院情報科学研究科教授 大学院先端生命科学研究院教授 大学院工学研究院教授 (転出) 徳島大学教授	井 上 哲 岡 嶋 孝 治 芳 賀 永 松 井 利 仁 難 波 康 祐	北海道大学病院講師 大学院情報科学研究科准教授 大学院先端生命科学研究院准教授 京都大学大学院工学研究科准教授 大学院理学研究院准教授
【准教授】 大学院獣医学研究科准教授 大学院情報科学研究科准教授 (転出) 山形大学大学院理工学研究科准教授	下 鶴 倫 人 筒 井 弘 西 山 宏 昭	大学院獣医学研究科助教 京都大学大学院情報学研究科助教 電子科学研究所附属グリーンナノテクノロジー研究センター准教授
【技術職員等】 北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院看護部看護師	側 糸 織 小 泉 文 平 長 尾 加菜江	採用 採用 採用

部局長等（再任）紹介

平成25年5月1日付

教育学研究院長・教育学院長・教育学部長に

あねざき よういち
姉崎 洋一 教授

姉崎洋一教授は、平成23年5月1日から教育学研究院長・教育学院長・教育学部長を務め、平成25年4月30日をもって任期満了となりましたが、引き続き同教授が再任されました。

任期は、平成26年3月31日までです。

新任教授紹介

平成25年5月1日付



歯学研究科教授に

いのうえ さとし
井上 哲 氏

口腔医学専攻臨床教育部門

生年月日

昭和32年7月3日

最終学歴

北海道大学大学院歯学研究科博士課程修了(昭和61年3月)
博士(歯学)(北海道大学)

専門分野

歯科保存学



情報科学研究科教授に

おかじま たかはる
岡嶋 孝治 氏

生命人間情報科学専攻生体システム工学講座

生年月日

昭和43年9月21日

最終学歴

東京工業大学大学院理工学研究科修士課程修了(平成5年3月)
博士(理学)(東京工業大学)

専門分野

生物物理学, バイオナノテクノロジー



先端生命科学研究院教授に

はが ひさし
芳賀 永 氏

先端融合科学研究部門細胞ダイナミクス科学分野

生年月日

昭和42年1月14日

最終学歴

北海道大学大学院理学研究科博士後期課程修了(平成7年3月)
博士(理学)(北海道大学)

専門分野

細胞生物学, 生物物理学



工学研究院教授に

まつい としひと
松井 利仁 氏

環境創生工学部門環境管理工学分野

生年月日

昭和36年5月5日

最終学歴

京都大学大学院工学研究科博士後期課程修了(平成元年3月)
工学博士(京都大学)

専門分野

環境衛生学, 騒音, サウンドスケープ

訃報

名誉教授 石黒 亮二 氏
(享年83歳)



名誉教授 石黒亮二氏は、平成25年3月31日、83歳でご逝去されました。

先生は、昭和5年5月28日に札幌市に生まれ、同28年3月北海道大学工学部機械工学科を卒業、同30年3月同大学工学研究科機械工学専攻修士課程を修了されました。昭和30年4月帝国人造絹絲株式会社に入社し研究所勤務後、同32年7月北海道大学工学部機械工学科講師として着任、同33年1月に

同助教授に昇任し米国留学後の同43年9月に北海道大学から工学博士号を授与されました。

同学部原子工学科の新設に伴い昭和44年4月同学科勤務となり、同45年10月に教授に昇任され、原子力安全工学講座を担当し原子炉の熱工学・安全工学の分野の教育・研究に尽力されました。平成元年4月にはこの間の研究が評価され日本機械学会論文賞を受賞されました。平成6年3月31日に定年退官され、同年4月北海道大学名誉教授になりました。

この間、学内では学生部委員会委員、留学生委員会委員、国際交流委員会学生交流専門委員会委員などを歴任され、平成元年6月には北海道大学評議員として大学運営に参画されました。工学部では、大学院制度委員会、企画委員会、加速器研究室運営委員会など

の各委員長を務められました。

学外では、文部省学術審議会専門委員、日本学術会議原子力研究連絡委員会、同熱工学研究連絡委員会、同原子力基礎研究連絡委員会の各委員、科学技術庁高レベル放射性廃棄物地層処分推進検討会、同原子力研究開発支援技術高度化検討委員会の各委員、日本学術振興会審査員などを務められました。また、日本伝熱学会会長、日本原子力学会理事、同編集委員長、日本機械学会評議員などを歴任されました。

以上のような功績に対して、平成22年春には瑞宝中綬章が授与されました。

ここに謹んで先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(工学院・工学研究院・工学部)

資料

役 職 員 数

平成25年5月1日現在

部 局 等	職 種	総 長	理 事	監 事	小 計	教 授	准教授	講 師	助 教	助 手	小 計	専門職	事務職員	技術職員	合 計
役員		1人	7人	2人	10人										10人
監査室													4		4
事務局	総務企画部												69	1	70
	財務部												79		79
	学務部												59		59
	研究推進部												29		29
	施設部												9	24	33
附属図書館												89		89	
文学研究科・文学部					51	41		12			104	15	2	121	
法学研究科・法学部					34	19	2	9	4		68	19		87	
経済学研究科・経済学部					24	20		5			49	2	7	58	
医学研究科・医学部					44	25	12	58	3		142			13	155
医学系事務部													38	2	40
歯学研究科・歯学部					16	13	2	48			79	10	5	94	
獣医学研究科・獣医学部					14	13	3	16			46	11	3	60	
情報科学研究科					41	36		17			94				94
水産科学院・水産科学研究院・水産学部					31	38	1	11			81			39	120
函館キャンパス事務部													23	4	27
環境科学院・地球環境科学研究院					21	25		9	1		56				56
環境科学事務部													13		13
理学院・理学研究院・理学部					74	67	5	50	2		198	2		19	219
理学・生命科学事務部													39	2	41
薬学研究院・薬学部					15	13	5	25			58			2	60
薬学事務部													12		12
農学院・農学研究科・農学部					47	38	24	13			122			11	133
農学事務部													21	2	23
生命科学院・先端生命科学研究院					11	6	2	8			27				27
教育学院・教育学研究院・教育学部					17	19		4	1		41				41
教育学事務部													7		7
国際広報メディア・観光学院 メディア・コミュニケーション研究院					26	26		2			54				54
メディア・観光学事務部													7		7
保健科学院・保健科学研究院					28	16	6	18	1		69				69
工学院・工学研究院・工学部					100	97	3	83	1		284			45	329
工学系事務部													67	4	71
総合化学院															0
公共政策学教育部・公共政策学連携研究部					11	6	2				19				19
北海道大学病院					5	15	54	84			158		113	662	933
低温科学研究所					14	10	2	18			44		9	9	62
電子科学研究所					16	11	1	21			49			10	59
遺伝子病制御研究所					8	7	3	12			30			7	37
触媒化学研究センター					8	8		6			22			6	28
スラブ研究センター					8	4		1	1		14				14
情報基盤センター					6	4		2			12				12
アイソトープ総合センター					1	1		1			3			2	5
総合博物館					2	3	2	2			9				9
量子集積エレクトロニクス研究センター					3	3					6				6
北方生物圏フィールド科学センター					15	12		13			40		18	73	131
知識メディア・ラボラトリー															0
脳科学研究教育センター															0
人獣共通感染症リサーチセンター					5	4	1	2			12			2	14
大学図書館								1			1			1	2
観光学高等研究センター					3	1					4				4
外国語教育センター															0
アイヌ・先住民研究センター					1	3		1			5				5
社会科学実験研究センター								1			1				1
情報法政策学研究センター															0
環境ナノ・バイオ工学研究センター															0
数学連携研究センター															0
サステイナビリティ学教育研究センター					1						1				1
トロジー理工学教育研究センター															0
環境健康科学研究教育センター															0
探索医療教育研究センター					1	1					2				2
保健センター					1			1			2			9	11
情報環境推進本部													13	14	27
産学連携本部												7			7
アドミッションセンター															0
人材育成本部															0
創成研究機構							1		1		2	1		8	11
国際本部					3	6	4				13	5	26		44
高等教育推進機構					3	5					8			4	12
サステイナブルキャンパス推進本部															0
安全衛生本部							1				1	1			2
北キャンパス合同事務部													12		12
合 計		1	7	2	10	709	618	135	554	14	2,030	18	818	985	3,861

(総務企画部人事課)

編集メモ

●本年4月に開校となった「北海道大学新渡戸カレッジ」。英語の選抜試験により129名が入校しましたが、その約3倍にあたる397名もの学部入学生から応募がありました。

5月15日（水）に高等教育推進機構で行われた開校式には報道機関の取材も入り、新渡戸カレッジに対する期待の高さがうかがえました。4年間の多様な学びを経てフロンティア精神を育み、カレッジ生がどのように飛躍を遂げていくのか楽しみです。（関連記事2頁）

●NHK Eテレの科学(?)エンターテインメント番組「すイエんサー」の特別シリーズ、「北海道大学からの挑戦状！リターンズ！！」が、6月11日（火）・18日（火）・25日（火）19：25～19：50の3回にわたり、全国放送されます。2月と3月に放送された同番組での対決におい

て、本学工学部チームがすイエんサーガールズチームに辛くも勝利しましたが、大混戦だったこともあり“リターンズ”と銘打ち、両チームが4月18日（木）に学術交流会館で再対決を行いました。

今回の対決の行方は…？ 勝利を手にするのはどちらのチームか…？

ぜひ番組をご覧ください！





2010. 5. 16 函館本線 倶知安～小沢（倶知安町）

北の鉄道風景 ② 残雪を抱く羊蹄山

道央の秀峰「羊蹄山」は、その姿が富士山に良く似ていることから、「蝦夷富士」としばしば呼ばれる。この山は独立峰であるから、360度あらゆる方向から眺めることができるが、見る角度によって、その形は微妙に異なって見える。最も美しく、富士山とそっくりに見えるのは北側から見た場合であり、南側から見た場合はやや形が崩れて見える。写真は、羊蹄山の北側に位置する倶知安町で撮影したもので

ある。この辺りは、羊蹄山と列車を一緒に撮影できるポイントとして、昔から良く知られている。残雪を抱く羊蹄山をバックに、ローカル列車がトコトコと駆けて往く。長かった冬が終わり、北の大地は本格的な春を迎えようとしている。

情報科学研究科 准教授 山本 学

北大時報 ⑤ No.710 平成25年5月発行

北海道大学総務企画部広報課 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目
TEL：(011) 706-2610 / FAX：(011) 706-4870 / E-mail：kouhou@jimuhokudai.ac.jp
北大時報はインターネットでもご覧いただけます。http://www.hokudai.ac.jp/bureau/populi/